

2021年10月17日 説教「いのちの日の限り」

詩篇 23 篇 1～6 節

「わたしは～です」と主イエスが言われた箇所をヨハネ福音書から学んできましたが、今朝は次の学びの合間として、詩篇 23 篇から学びます。



1. 羊飼いと羊 (1～2 節)

①羊飼い (1) **「主は私の羊飼い。」** イエス・キリストは「わたしは、良い牧者です。」(ヨハネ 10:11) と言われました。その時に飼われている羊とは誰のことなのでしょう。言うまでもありません。私たちです。弱い人間です。羊は迷いやすく、狼のような外敵に狙われやすいのです。

詩篇 23 篇の作者も、この詩の冒頭に、「主なる神は私の羊飼い」と告白しています。この詩の作者は表題にもあるようにダビデです。ダビデは預言者サムエルを通して、主なる神に召し出され、王へと導かれていきました。紀元前千年頃のことです。ダビデは選ばれるまでは、羊飼いでした。だからこそ、羊の生態をよく知っていました。彼は羊にはどうしても羊飼いが必要であるということを知っていました。だからこそ、ダビデは主なる神こそが、自分の羊飼いであると告白できたのです。

②乏しくない (1) **「私は乏しいことはありません。」** ダビデは告白します。弱い羊のような自分にとっては、神は最高の羊飼い。この羊飼いがいれば、自分は草を食むことができる。また、羊飼いはどこに滋養のある草が豊かに生えているかも知っているので、羊達は安心してついて行き、着実に草を得ることができるのです。だから、主が羊飼いであれば乏しいことがないのです。ダビデ本人にとっても、生きる霊的な力を絶えず与えてくれるのは、羊飼いであるところの主なる神であると確信していました。

③いこいの水のほitori (2) **「主は私をみどりの牧場に伏させ、いこいの水のほitoriに伴われます。」** その主は、私ダビデをみどり色に覆われた、草原の豊かな牧場に伏させてくださるのです。食していくことに何の不足もありません。そればかりではありません。主は自分たちにとって、必要な水のある場所にまで自分たちを導いてくれるのです。ヤコブが、羊に井戸の水を飲ませていたラケルと出会った時の事が思い出されます(創世記 29:1～8)。ダビデにとって水とは、主からの霊的な水、生きる力でありました。

2. 主がともにおられる (3～4 節)

①義の道に (3) **「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。」** 羊飼いである主なる神は、羊であるダビデのたましいを生き返らせてくれました。水が乏しく、草が乏しければ羊は弱ります。しかし、それらにあずかることができれば、生き返るのです。霊的弱りを感じずるダビデは、主からの清新な息吹と御言葉をい

ただくことによって力が回復したのです。彼は、導き主は本来行くべき道、神の喜ばれる義の道に導いてくださると確信しました。ダビデも霊的に迷いやすく迷い道に入りそうな自分を主が導いてくださったことを証しているのです。そして、そのことはとりもなおさず、主の御名があがめられていくことでもあったのです。

②**死の陰の谷** (4)「**たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。**」イスラエルには、断崖の中腹に細い道ができた谷がありました。向こうに行くには、どうしても通らなければならない恐ろしい道です。それが「死の陰の谷を歩く」ということです。しかし、その道を進む時にも、主がともにいてくださるなら、わざわざを恐れることはないのです。ダビデは人生の試練に何度も遭遇しました。しかし、その度ごとに主が乗り越えさせてくださったのです。

③**私の慰め** (4)「**あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。**」ダビデは主が与えられる試練をむち、弱りがちな足をささえる主の支えを杖にたとえました。それらは慰めであり、励ましでありました。実際のところ、サウル王に追われる時も、ゴリアテと戦った時も、主がダビデを支えてくれていたのです。

3. いつくしみと恵み (5~6 節)

①**杯はあふれ** (5)「**私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油を注いでくださいます。私の杯はあふれています。**」ダビデにとっての戦いの敵がペリシテ人であることもありました。それらの敵を前にしている時にも、ダビデに霊肉の食事を与えてくださって、力づけ彼の頭に聖霊の油を注いで送り出してくれるのでした。その霊的励ましは、ダビデには自らのたましいの杯が溢れるほどの満たしを感じていたのです。

②**いのちの日の限り** (6)「**まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追ってくるでしょう。**」それほどに恵まれていたからこそ、ダビデには信仰と希望がありました。自分が生きている限りは、これまでそうであったように、いつも変わらず主からの慈しみと恵みとが、自分に注がれ続けるであろうと確信したのです。

③**主の家に** (6)「**私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。**」そして、ダビデは信仰の決意を述べます。「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」と。つまりは、共にいてくださる方から離れずに、その方を見失わないようにして歩いていこうと決意しているのです。「主の家」とは主がともにいてくださるところ。今日では主の教会は、見えるかたちでの主の家であります。主がいてくださる教会を通して、主が働いてくださることは確かなことです。キリストの教会につながっていくことは、信者にとっては不可欠なことです。

《結論》

詩篇 23 篇を記したダビデにとっての主は、新約時代の主イエス・キリストです。ぶどうの木であるキリストにつながってこそ、枝であるクリスチャンは生きていくことができることを、私どもは学んだばかりです。

さて、ダビデによる詩篇 23 篇は、多くのクリスチャンが愛し親しんできた詩篇です。この詩篇は、よく葬儀の時にも読まれるのです。昨日の葬儀の挨拶状にもこの詩篇が記されていました。私どもが高校生の時に、教会員の子息で私の一学年上の友人が癌で召されました。同学年の高校生たちが大勢教会の葬式に参列しました。その時に、私を信仰に導いてくださった日曜学校の女性教師がこの詩篇 23 篇を読み上げたのです。心に響いてきたことを忘れません。

「たとい死の陰の谷を歩くことがあってもわざわざを恐れませんが」という一文があるがゆえに、人間が死と隣り合わせに生きている存在であることを意識させられるのです。いつ何時、突然として主が天に召される時がやってくるかもしれません。それでは、こわがってびくびくしながらその細い道を歩いていくのかといえば、そうではなく主がともにいてくださると信じてその道を進んでいくというのがこの詩の作者の心でありましょう。

その面では詩篇 23 篇は、人間はこの地上での命を終える存在であることを覚えつつ、生きる限りすべてを備えてくださる主をしっかりと見上げながら歩いていくことを告白している詩でもあります。

私たちは、愛する主にある兄弟である大高茂樹兄弟を天に送りました。今年は 6 月に新田恵美子姉を天に送りましたので、相次いで大切な方々を地上的には失ったこととなります。かつて植村正久牧師が自分の二女が天に召された時に、「家には一人を減じたり。楽しき円樂は破れたり。愛する者の平常の席に見えぬぞ悲しき。さあれ天に一人を増しぬ。・・・」と書き連ねています。私たちの小さな群れも、この年に二人を天に送り出しました。地上の教会には減しましたが、それは天に一人が増すという恵みなのです。

今覚えましょう。「メメントモリ」というラテンの語の言葉です。「死を忘れるなかれ」という意味です。この地上に生きる者たちは、主が養ってくださり守ってくださることを信じて、生きていきます。しかし、この地上の命はやがて終わっていきます。そのことを忘れないことです。かといって、死ぬことをこわがって生きるということではありません。私たちにはソーウェー（永遠の命）が与えられているのです。地上に生かされている間は、感謝しつつ歩むのです。そして、主は私たちが地上に生きる限り、霊的にも、身体的にも養ってくださると確信したいのです。そのことを信じて歩むのです。そして、この詩篇からいうならば、自分たちが羊のように、迷ってしまいやすい者であること、弱くて外敵に襲われてしまう者達であることを自覚するのです。そして、羊飼いである主とともに歩んでこそ、私たちは養われ、成長が与えられていくと覚えましょう。羊飼いである主といつも共に歩いていきましょう。